

2011年12月14日(水)

第一生命経済研究所 経済調査部

副主任エコノミスト 人見 小奈恵

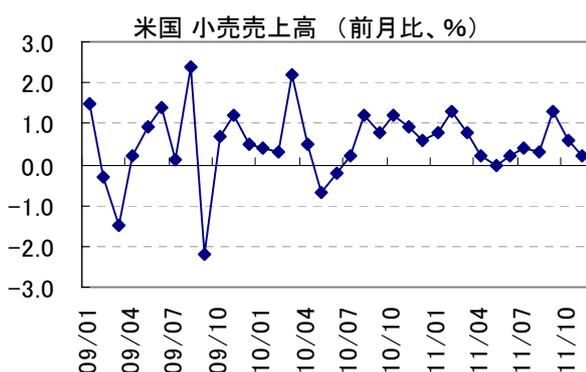
TEL 03-5221-4523

e-mail: hitomis@dlri.dai-ichi-life.co.jp

スペイン入札は順調に通過も、独首相のESMの拠出額上限引き上げへの否定的な姿勢に投資家は失望

欧州株式市場は強弱まちまちの展開でした。スペイン入札を控えて小幅反発で寄り付いた後は、石油大手の通期増益見通しの上方修正を好感して石油セクターが上げを主導する場面もありました。公的支援の可能性について独財務相と交渉の場を持ったとの観測記事が報じられた独銀行大手株が売られ（その後、当銀行は報道を否定）、欧州株は金融セクター主導でマイナスに転じる場面もありました。しかし、その後実施されたスペイン国債入札で12ヵ月物、18ヶ月物いずれも平均落札利回りが前回より低下し、調達額は49.4億ユーロと目標（32.5～42.5億ユーロ）を上回りました。さらにEFSF初となる短期債入札では19.7億ユーロを調達し、応札倍率は3.2倍とますますの需要と受け止められて安心感が広がりました。12月の独ZEW景況感指数が予想に反して前月比で改善したことも追い風となり、下げ幅は縮小。しかし、引け間に独メルケル首相が、来年3月に見直し予定である欧州安定メカニズム（ESM）の融資限度額引き上げについて反対姿勢を示したことが伝わると、ユーロドルが急落し、欧州株式市場は再び金融セクター中心に売りが膨らみ、フランス、ドイツ、イタリアなどの主要株価指数は続落して引けました。

米国株式市場は小幅反発して寄り付いたものの、欧州債務問題への懸念からユーロ安が進行する中、米国株は上げ幅を縮めました。その後、FOMC声明文で、労働市場に改善が見られると指摘する一方、追加の量的緩和策に関する文言が含まれなかったことなどから失望売りが広がり、結局、NYダウは▲66ドルの11,954ドルで引けました。米家電小売大手の予想を下回る決算や、11月の米小売売上高が前年同月比+0.2%と予想（+0.6%）を下回ったことも年末商戦への期待後退につながりました。



(出所) Bloomberg



欧州動向を睨み、国内市場は動意薄

米国株安を受けて日経平均株価も弱く寄り付いた後は、手がかり材料難の中、8,500円を挟んでの一進一退の展開でした。下げを主導したのは電機や自動車などの輸出セクターで、ユーロ円が約二ヶ月ぶりの101円台まで下落したことが重しとなったほか、中国株安を受けて新興国関連株の弱さも目立ちました。また、株価指数先物が現物指数を下回って推移しており、株価指数先物の売り圧力の強さも感じられました。徐々に値

下がり銘柄数も7割近くまで増え、結局、日経平均株価は前日比▲33円安の8,519円と続落して引けました。東証一部売買代金は9,187億円と相変わらず低調でした。売買代金トップは本日東証一部に新規上場したオンラインゲーム株、二位は巨額損失隠し発覚を受けて決算訂正を行なった大手精密株で、両銘柄だけで全体の約7%を占め、市場全体のエネルギー不足が感じられました。本日、新規上場したオンラインゲーム大手株は今年最大のIPO案件でしたが、公開価格を若干上回る水準で初値をつけた後は軟調に推移し、公開価格比▲2.3%安で引けました。このことも投資家の投資意欲の弱さが感じられました。上海総合株価指数も4日連続で年初来安値を更新して引け、全体的にリスク回避の動きとなりました。

昨晚の海外市場ではスペイン国債やE F S F債の入札が順調に通過しましたが、今晚はイタリア国債、明日はスペイン国債の入札が控えています。多くの投資家が欧州債務問題への不安を抱く中、入札状況や欧州国債利回りの動向が引き続き注目されます。